

中京大学体育学研究科学術講演会

「スポーツとして見た蹴鞠」

渡 辺 融*

“Kemari” as a Ball Game

Tooru WATANABE

司会者（木村）：

今日は、「スポーツとして見た蹴鞠」ということで、東京大学の名誉教授で現在放送大学の教授をなさっております渡辺融先生をお招きしてお話を聞くことになったわけでございます。

先生は、東京大学時代は野球の名選手で神宮球場を沸かせた先生でございます。

大学では文学部国史学科で歴史を専攻された先生なのですが、野球をやった関係で東京大学教養学部の体育科の教官として採用され、長く講師、助教授、教授というふうに勤められたわけでございます。私どものスポーツ史学会の中でも国史の専攻という方は非常に少ない。先生以外にほとんどいらっしゃらないというような貴重な存在で、スポーツ史学会会長も勤められたわけでございます。

蹴鞠は、ここに留学生、中国、韓国から来る留学生がいるわけですが、これから、先生のお話の中にありますように中国の方から入って来たわけなんですね。

韓国にも同じように、やはり、この蹴鞠の文化は伝わっていたと思われまして、そういう点でこの比較対照をすることもできますし、このボールを蹴って遊ぶという、そういうスポーツ

の文化ですね、それが日本で非常に発達していた時代があったということですね。それがどうして現代につながらなかったかという問題がありますけれども、そういうかつてのスポーツ文化というものを振り返ってみて、その中から現代に生きるものを汲み取ろうということで今日のお話を伺いたいというふうに思います。

それでは先生、よろしくお願いします。

渡辺先生：

ただ今、木村先生から大変過分なご紹介をいただきまして。私は、野球の選手としてはたいした選手じゃございませんで、東京大学でかろうじて外野の片隅で守らせてもらって、ピンチヒッターで時々出るというような程度でございました。たまたま、私の野球の恩師が神田順二先生という教養学部の体育の、その当時は助教授の先生でいらっしゃいました。私が教師志望である。ただ、免許状は社会科であるから高等学校の歴史の先生をやりたいと思っていると申しましたら、どうせ教師をやるなら体育も歴史も同じようなものだから俺のところへ来いと言われてまして。俺のところへ来たらずっと野球ができるぞと言われてましたのでつい、くらっと神田先生のところへ馳せ参じまして、

*放送大教授

それっきりずっとお世話になっているというよ
うな縁で体育に足を踏み入れたのでございま
す。

だものですから、この歳になりましてはまだ
ボールと縁が切れませんで、そもそも蹴鞠の研
究をいたしましたのも、動機はと申しますと、
日本人の私がアメリカ生まれのベースボールに
これだけ魅入られてしまって、50数年これと付
き合っただけにまだ神宮のネット裏でスコアを
付けたりなんかしておる。

これだけ現代日本人が野球が好きだと。私の
父親も実は高等学校、大学で野球をやっており
ます。野球は関東大震災の頃、震災にあったも
のですから途中で辞めたんですけれども。親子
2代野球に魅入られたんです。これだけ今も
我々が野球気遣いなんだから、前近代の日本人
の中にもボールマニアがいるだろうと。野球は
なかったにしても、何かボールゲームがあった
に違いない。ヨーロッパでも、やっぱり、テニ
スがあったり、あるいはフットボールがあった
りしたのではないかとということで、日本のボール
マニアのルーツを探してみたい。そういうのが
いたらその人と会話をしてみたいと。もちろん、
これは資料を通してのことでございます。それ
が、そもそも蹴鞠の研究を始めた動機でありま
して、ごく我ままな、天下国家を考えた上での
動機ではございませんでした。

ところが、これがちょうど今から10年ほど前
でございまして、もう、あと数年で定年だなあ
と。それからあと10年も頭がもてばいいから、
人生の収束。暮で申しますと寄せでございま
すが、の仕事としてボールマニアの歴史でも書い
てみたいというのが希望でございましてこうい
うことを始めました。

ところが、始めまして2、3年経ちましたとこ
ろで、ある本に出くわしたわけです。それが『内
外三時抄』、その本を見ましたところ、実はまだ
その本の一部しか日本語の現在の活字にはなっ
ておりません。これは『群書類従』という有名
な塙保巳一が編集いたしました叢書に入ってい
るわけでございます。ところが、そこに入っ
ているのは、今のスポーツの言葉で言いますと施

設とか用具とか、それから装束、着る物でござ
いますね。そういった部分しか入っておりませ
ん。実際のテクニックに関する事とか、ある
いはイベントをどうやってやるかというような
ところは実は漏れております。

ところが、たまたま研究を始めまして2、3年
経ちましたところで、そのテクニックに関する
ものが実はあって、もちろん活字になってない
のですが、天理図書館に入っている。で、天理
図書館はそれを写真版にしてつい最近出したと
聞きました。そうですね、おそらく1989年ぐら
いだったと思いますが、その頃にそういうこと
を知りまして、それを読みました。

練習篇というのがありまして、そこに大変
細々と初歩からの蹴鞠の練習過程が書いてござ
います。それから、蹴鞠のチームとしての動き
はどうやるのかというようなことも書いてござ
います。チームプレイ8人で、あとで申します
ように書いてございます。そこで、初めて蹴鞠
というのがいかに今から見ますと千年近く前に
日本人がやっていたボールのゲームでございま
すので、いかにうまくアーティフィシャルに組
み立てられたスポーツであったかと。しかも、
そのおもしろみというものを大変、高度な技を
使うおもしろみということに集中をしたスポー
ツであるということが分かりました。

そのときに初めて我々の先祖を私は見直し
まして、こんな見事なスポーツを作ってきたわけ
です。日本の伝統的なスポーツといえますと、
我々が知ってるところでは柔道とか剣道とか、
あとは相撲、これももちろん結構なものでござ
います。

しかし、私が数十年前、20年か30年ぐら
い前に読みました文化人類学の、確かサットン・ス
ミスというアメリカの文化人類学者だと思いま
すが、その人が確か、要するにある部族の遊戯、
ある民族の遊戯というのは、やっぱり、その民
族の文化を反映したもの、そのサットン・スミ
スが言うのは社会的な階層文化と言ってるよう
でございまして、複雑な階層関係ができ上った。
言ってみれば文明的な社会ということになり
ましょうか、階級社会ができあがったところ

の遊びというのは、やっぱり、それを反映した複雑な遊戯というものができたというような話で、やはり、日本の蹴鞠がこれだけ人工的にうまく磨き上げられているということは、やはり、それを作り上げた平安時代から鎌倉時代の公家の世界、貴族の社会というのは、そうとうそういう意味ではもちろん政治としては武士にもかなわなくなった時代で、どちらかというと遊んでる階級というふうにあまり歴史的にはいい評価は受けないわけでございますけれども、そういう文化的な創造力という点では大変高い能力を持っていたということを知りまして、見直さざるを得ないと思います。

で、こういう遊び心に満ちたスポーツを持っているということは、日本人が明治以降、近代日本というのはやはり西洋社会に追い付け、追いつ越せということで富国強兵策を取り、アジアの諸国を武力で侵略をして、それで世界の列強にのし上がったということをやったわけでございますが、その時代の日本、私が子どもの時代の日本は尚武の国である。武を尚ぶ国であるというふうに教えられました。であるから、お前たちも軍事教練なり武道なりを一所懸命やって、大人になったら天皇陛下の役に立って潔く戦死をするんだというふうな教育を受けたわけでございます。もちろん、それに反対する人もおりましたけれども。そういうのが教育の主流でございました。

そこでは、やっぱり、日本の伝統的なスポーツというと、ああいう男らしい武道とか柔道とか剣道とか相撲であるというふうに教わった。ああいう遊び心に満ちた大変凝った技術をデモンストレートするスポーツというものがあったということ。それは私は知りませんでした。

ただ、お公家さんの雅やかな遊びという程度のことしか知らない。やはり、そういうことを知ることで自分の民族、あるいは日本というものを再認識するということが大事かな。今、三内丸山遺跡が出て来たり、あるいは、ついこの間銅鐸が出雲の奥からまとまって出て来た。やはり、これは全部日本の歴史を見直すような資料で、大和国家中心、あるいは天皇中心にみん

な奈良県の方を向いて古代の日本人は暮らしていたというような認識を改めさせるような発掘であり、事実の歴史的な発見であります。それと同じような発見、それと似た種類の発見ではないか。やっぱり自分たちが自分たちに対する認識を改める、そういう感じがしたわけでありまして。で、やっぱり、そういうことをアジアの人たちなり世界の人たちなりに知ってもらうことというのは意味がある。日本に対する認識を改めるといって意味があったというふうに考える。これが、実は今日お配りした2番目の「問題意識の変遷」というところでございます。

で、やってみますと、我々がその歴史の文献史学ということで主に文書資料に頼るわけでございますが、蹴鞠の本の資料を探しますときにいちばん頼りにするのは岩波書店から出ている『国書総目録』（7巻本）。日本の前近代を研究しようと思ったら、もう絶対それは必要な物でございます。

で、探していってみるとあの『国書総目録』は非常に立派な物でありますけれども、あそこに入っている物は蹴鞠の中では3分の1にしか過ぎない。今まで私が10年間の調査で分かったところでも、残り3分の2はあれに出ない物である。要するに、眠ってる物がたくさんあるということに気がつきました。

まだ、これから、おそらくたくさん出て来る。例えば、例の冷泉家という、あれは和歌の家でございますが、親戚は蹴鞠の家でございまして、南北朝時代、14世紀の末に途絶えました。ところが、公家の家というのはいへんそういう残った資料を大事にいたしますから、そういう家の書物は必ず近辺の、例えば御所に預け、天皇に預けるとか親戚が預かるとかしまして、その家が復興したときにはそれを戻すということをするわけです。ですから、その文書を跡継ぎがお家争いという意味で争いますと、それをどっちが取るかって大騒ぎになりますが、冷泉家というのは親戚が、鞠の家で、数百年前に潰れてしまいました。あそこからはおそらくまだ出て来ておりませんが、そのうちに蹴鞠の本が出て来るだろうと。大変私は楽しみにし

ているわけでございます。そのような、やはり、資料を作るといのは大変な仕事で、もちろん限られた資料なんだけれども、やはり、かなり無尽蔵にあるのではないかという感じがいたしているわけでございます。

というわけで、妙なところから入ってしまいましたけれども、まず、いちばん始めの「スポーツとしての蹴鞠」ということから申しまして、スポーツというの、じゃあ、どう考えるかということが問題でございますが、ここに書いてありますように今から14年前でございますが、桑原武夫という京大の先生、フランス文学の先生でございますが、この方が水野オピニオン・イン・コンサートの確か現代社会におけるスポーツという講演をなさりました。それは、一と月後ぐらいで『エコノミスト』という雑誌に出ました。

そのときに、桑原武夫さんの言っていたことが、スポーツは現代文明の最も新しい一つの領域、独立した領域になっている、それは現在の科学と共に最も新しい領域の一つ、これが一つです。それから、スポーツは、音楽と共に最も若者に人気がある、若者だけではない、日本の社会で人気のある文化の一部ということなんです。

音楽やスポーツが最も人気があるということは、やはり、肉体的解放であり身体的解放である。肉体的な欲望の充足、肯定の風潮というのが、言ってみれば理性とか、あるいはそれ以前の宗教というものからの解放ということがずいぶんあるということ、要するに何事でも直接的に体に受けとめようということである。そういう風潮の現れであるという話、これが2番目。

3番目としては、スポーツというの日本でもあまりにも特異的な解釈をされすぎている。いろいろな社会的な、いろいろな道徳的な美德が身に付くからスポーツはやるんだ。あるいは、そういうものでないとスポーツではないというような言い方をされているけれども、それはもう今や通用はしない。それから、アマチュアリズムの美点、これはこの頃、それほど驚かないことになっておりますが、そういうような美德が金銭の授受によって失われるということであれ

ば、それは現在の産業社会の規定である。すべての物がそうであると、それで失われるということになると、それはおかしいと。

それから、スポーツがカイヨワ (R. Caillois) によると遊びの1領域。ところが、それがだんだんと真剣性が高じてきたとか何とかで遊びの要素が薄れてきたという、遊びの要素の中に非生産性というのがある。ところが、その非生産性ということもスポーツが情報を生産するということを考えれば、決して非生産ということとは言えない、現代社会では、情報というのは非常に大事な商品であるというようなことを言っている。これは大変印象的な言葉であります。

で、最後に、私の大変耳が痛かったのは、現代の日本のスポーツの思想は非常に浅薄であるということをおっしゃっております。確かに、日本のスポーツというの、体育とスポーツの区別が非常に付きにくいということ自体が、そうでありまして、スポーツというの何かの手段として使われる。体育の手段である、あるいは健康の維持、増進の手段である。あるいは、社会的な道徳を高めるための手段である。部生活がよろしいとか礼儀が正しくなるとかいろいろ申します。それはそれで手段としての価値である。やはり、スポーツ独自の価値といいますか他の教育であるとか、あるいは健康何とかであるとかいうようなものに従属して存在意義を主張するようなことでは、やはり、独立した領域とは言えないわけで、やはり、そのためには、スポーツ独自の価値というの何であるか。最近、玉木さんとかあるいは三浦さんとかいう方が、これは評論家とか作家でありますけれども、随分昔から言われていることでもありますけれども、美という世界、芸術という世界、特に踊りであるとか、そういうものになぞらえて、やはり、それに近いんだということを言っているわけです。

それはそうかもしれない。でも、私は、スポーツというの、もしも固有の価値といいますか、あるとすれば、それは今のスポーツということから言えば身体を動かす能力ということ、自分の身体を動かす能力ということに独自の価値と

いますか、それをよしとしてるのがスポーツなんです。

芸術というのはどうしたって美という感じから抜け切れない。スポーツは、決して美というのは中心的な課題ではない。やはり、上手いな、強いなっていう表現、あるいは速いなという表現、これはスポーツ科学的に言えば、敏捷性であるとか筋力であるとか持久力であるとか巧緻性であるとかいうことになりましょけれども。そういった、体を使う能力であります。これは、人間なら当たり前じゃないかということになるわけですが、この頃のように人間が高齢化して極限状態まで達してみると、やっぱり、体が動かなくなっちゃう人がいるということが、そうしてみるとそのありがたみが分かるわけでありまして。やはり、これは人間として非常に大事な価値であるということが言えるのではないか。

そういった意味で、私がスポーツのプレーヤーをやったよさ、スポーツが何をよしとする、やっぱり、そういうものであると。昔からそういうものがあるということ、例えば、神様に対する捧げ物、奉納として流鏝馬をやる、あるいは相撲をやるということになっている。あるいは、相撲の横綱の股をくぐると子どもが病気にならないとか、あるいは貴ノ花に抱いてもらって土俵入りするとその子どもは将来よろしいというような、やはり、そういった身体的な能力に対する評価というものがあるんだと。あれは良きものであるということだろうと思います。

私は、そういうところにやはりスポーツの独自性を、文化としての独自性を認めたいと思っております。そういう意味で、スポーツとしての蹴鞠。

金比羅様は日本で蹴鞠を組織的にやっている2カ所のうちの、たった1カ所でありまして、琴平蹴鞠会というのがある。そこを主催しておられた宮司の琴岡さんという、去年亡くなられた。その方は、私どもがそういうことで調査に参りましたときに、二つ組織的にやっているもう一つの京都の蹴鞠保存会というのがございます

ですが、そこは袂を分かった。それはなぜかと、琴岡さんが言うには、あの連中は蹴鞠はスポーツだと言っている、そういうようなことを言うやつとは一緒には付き合えないと。

私も困ったなあと思ったんですけれども、私はスポーツとして研究しておりますと言うわけにも参りませんのでそのときは黙っておったんですけれども。やはり、ああいう伝統的な文化を担っていた方はカタカナでスポーツと言われると大変軽薄、浅薄な感じを受けるようで、これは武道、柔道、剣道の方がスポーツ、柔道の方はそうでもない、剣道の方がスポーツと言われると大変嫌がる。一部の剣道の方でも嫌がる方もおられますが、そういうのと似たところがある。ですから、そういう方に対しては、やっぱり、そのスポーツという言葉に分かってもらわないといけないので、広く言えば蹴鞠はスポーツの一つですよどうしても私は言わざるを得ないわけですから、こういうタイトルを付けているわけでございます。

それで、配付資料の方の紹介をさせていただきますと、この文章の方でございますが、これは私が一昨年書きました『蹴鞠の研究』（東大出版会）の中の蹴鞠の概要ということで、これで蹴鞠のそれこそスポーツとしてのあり様を予め知っておいていただこうと配付しておいていただいたというわけです。これは、時間の後半でここに触れさせていただきます。

それから、もう一つの方これは蹴鞠の略年表ということで、日本の蹴鞠の時間軸に沿った鳥瞰図をこれで書いたつもりでございます。略年表の方でございますが、文章の方で大体蹴鞠の全体を、スポーツとしてのあり様は知っていただいて、その略年表の方で蹴鞠の時間軸に沿った変化を大体知っていただこうと思っております。

実は、私の研究の方法といたしまして、とにかく蹴鞠に関するいろいろな資料が出て参りましたときには全部、とにかく時間軸に沿ってそれを打ち込んでしまうということにしております。何でもいいからとにかく、何年何月にどういことがあって、それは何に出ているということを全部打ち込むことになっておりまして、そ

れをずっと続けてここ何年かやっておりますけれども。10年ぐらいでございますが。大体、これにしまして30枚近くに今なっておりますが、その中から今日皆さんに蹴鞠の歴史的なアウトラインを知っていただくためにこれを抜粋して参りました。

で、大変大まかに申しますと、今日配付いたしました講演要旨の3のところの1)から8)まで大まかに時代の区分をしてございます。

どうも、私は、一つのところを長く時間的に取ってやらないと何となくやった気がしませんので、一つの蹴鞠なら蹴鞠という社会的な事象を時間軸に沿ってずっと追って、その変化をまず確認しその変化に対するいろいろな説明、皆さんに納得していただけるような説明を付けるというのが歴史だと思ってるものですから、そういうふうに、とにかく時間軸に沿って変化を確認するためにこういうふうに打ち込んでいってるわけであります。

この1)から8)までの区分を大まかに申しますと、7世紀から8, 9, 9世紀の第1項目目弘仁822年、この辺までは蹴鞠の伝来に係わる場所でありまして、蹴鞠は一応今のところ中国から来た。これは昔の10世紀とか11世紀とか12世紀に出ました蹴鞠の本でもそういうふうに考えておりますし、それから、現在の歴史家たちもどうもそういうふうに考えているようでございます。

ところが、それはいつ来たかということとははっきりしない。日本書記の皇極3年、例の大化の改新の直前に中大兄皇子、後の天智天皇と中臣鎌足、後の藤原鎌足が法興寺というお寺で蹴鞠をやって、そこで知り合いになってその謀議をした。で、蘇我氏を滅ぼしたという話がありました。その場面が蹴鞠ということになっている。

ところが、その蹴鞠は決して蹴鞠ではなくて打毬であったという説もございまして、意見が別れております。今だに決着が付いておりません。蹴鞠であっても野球であっても政治史、経済史中心の歴史にとってはたいしたことはないのでありますけれども、私のような者にとって

はどっちであるかは非常に大事なのですが、今のところまだ分かりません。文献史家は蹴鞠と言いますし、考古学をやっていた人などは打毬であるというふうに言っております。

そういうことで、7, 8, 9世紀のところは蹴鞠と打毬に係わる項目を拾ってみますと、どうも打毬の方に軍配が上がるような項目が多いということで、始めの4項目ぐらいを挙げております。

それから、次の仁明天皇の御前で、これ、忠良親王の蹴鞠、ただし、これは毛丸と書いてありますけれども、をしたという記事がございます。この辺からはどうも足で蹴ったという記事でございますので本当に蹴鞠があったらしい。

ただし、今、お話しているような中空のボールではなくて、どこでもそうでありますがいちばん始めは詰め玉。要するに、何か袋の中に動物の毛を入れたり、あるいは穀物の殻を入れたりして丸くして膨らませた物、それを使う。

どうやら、毛丸と書いてあるのがどうもそうではないか、日本でもどうも中空のボールがいつから出て来たかということとははっきりしない。それが9世紀のこのボールから大体10世紀、11世紀ぐらいまでは続くのであります。ただし、蹴鞠の遊び方として何回鞠を足で蹴るかというようなことがございます。それから、日本の蹴鞠は、「懸の木」と言って、ゴルフの例えばウオーターハザードであるとか、あるいは砂場、バンカーというのと同じようなものとして、木を使うわけでございますが。

そういった要素が出て来るのは大体、10世紀から11世紀にかけてそういう要素が出て来て、公家、貴族の間で蹴鞠がやられているという記事があるというのがこの第3区分であります。

それから、第4区分といいますのは、11世紀の後半で賀茂成助という方がおりますが、自分の家の庭に懸(かかり)を作った。これは賀茂社の神主さんですが。

で、自分の息子は蹴鞠のプレーヤーに、一所懸命命名手に仕立てるわけですけども、この時代からどうやら、ちゃんと意図的に懸を作って蹴鞠をやるというような時代になった。この時

代から後のいろんな前例が後の蹴鞠の故実になっている。そういう意味では貴族のやるような鞠、これは私どもは公家鞠と言っておりますが、公家鞠の故実の蓄積する時代。ですから、成立期と言ったらいいんでしょうか、形成期と言ったらいいんでしょうか、これが第4段階であります。

しかも、その第4段階の終りの方で、天皇自らプレーするという、大変珍しい事件があった。大体、天皇というのは地面を踏まないと言われていたくらいでありまして。ですから、天皇が蹴鞠をするときには下に蓆を敷いてやる。やりにくかったと思いますが、そういうことであります。後白河天皇という人は天皇の中では変わり者で、天皇らしい素養というのはあまりないけれども、流行歌と蹴鞠が上手かったというナウな天皇であります。で、政治的にも大変老獪だった。なかなか俗気のある、我々から見るとおもしろいんですけれども、きちんとした人から見るとあれはとても天皇は似合わんと、その同時代の人にもそれこそ有識者には人気はなかったと考えられます。その人が初めて蹴鞠をやった、プレーしたという、記録上ではそうなっています。これが第4段階の最後です。

第5段階は、13世紀からでありまして、蹴鞠の世界が組織化されていく。社会文化としての蹴鞠というのが出来てくるということで、言ってみれば家元制が出来てきているということになります。

それについては後鳥羽上皇という、大変個人的には能力が優れて、政治的にも有能であったかもしれないけれども、鎌倉幕府に対しては、戦争という無謀な冒険をやって失敗している。島に流されて帰って来れなかったという、大変珍しい天皇というわけで第1号ですけれども、ただそう言った政治力を必要としたわけですよ。

後鳥羽上皇というのは、天皇としては個人的にはスポーツの体力もあったし、運動神経も優れていたし、和歌の才能もあった大変優秀な人。私は、自分の才能を鼻に掛けすぎる、ということを感じるのでありますけれども、そういうよ

うなところがありました。

その蹴鞠会が、形成されるのが、第5段階。ここで貴族のいわゆる公家鞠、我々が現在見聞きするような、蹴鞠がきちっと成立してくる。それについては、衣装のちゃんと身分差を付けるように、鞆（しとうづ）と言いまして、蹴鞠の、野球で言うとあのストッキング。あの部分にあたるところにいろんな色のついた革の足袋をはく。その色で腕前と身分がきちっと分かるように、階級制度をつくる。これは後鳥羽上皇がやったことでありまして、そう言った意味での、故実、組織化ということ。ですから日本社会の中に蹴鞠が組み込まれていくこととなります。これが第5段階であります。我々の時代でも野球のストッキングというのは、みんな同じようなストッキングを履くのです。ところがやっぱり中には目立ちたがり屋がおりまして、全部紺のストッキングをみんなが履いていると、ちょっと俺は足が痛いからということで、足首のところに白いサポーターを巻きまして、一人片足だけ紺のストッキングの下の方が白くなっているというようなことをやる。一人だけ目立ちたがるようなことをするな、あれは良くない、というようなことをよく注意されました。あまり野球のユニホームで変わった格好をしてはいけない。と、いうようにやっぱり装束というのは、そのステータスのある程度表わす、これは身分社会では当然でありますから、イギリスのスポーツの世界でもやはり、レギュラーのボートの選手は、ブルー（Blue）とかどうか言う話はございますけれども、それと同じであります。それと家元制も出来るわけであります。蹴鞠の家が3家。これが第5段階。

第6段階は、革命期になります。ちょうど応仁の乱のあたりの、南北朝時代から、室町時代、戦国時代で内乱期になりまして、貴族はもちろん没落して財産は失って、明日の米にも困るといようなことでして、それでも貴族は貴族ですから、対面を保つためにいろいろ工夫をするわけですが、その代わり地方の武士とか、あるいは商人の有力な者が都市では台頭してくる。武士は地方で台頭してきて、あるいは堺の商人、

京都の商人。そういうのが台頭してきて、そういう人達が、あの蹴鞠をいたします。その段階になりますと、言ってみれば蹴鞠が全国的に普及していく。武士たちに普及していく。

ですから、京都のお公家様は、京都には暮らしていけないから、京都の文化を例えば和歌を教えるとか、蹴鞠を教えるとか、いろいろ教えることはたくさんありますから、それではちょっと朝倉の所へしばらく逗留して教えてくるかというような、まあ、アルバイトと言っただけは悪いのですけども、そういう疎開をするようになった。越前の朝倉とか、あるいは中国の山口の大内であるとか、小田原の北条。甲斐の武田とか、岩倉の織田。そういうところへ教えに直接行くわけです。

その時に教えるための伝授書があるわけですが、そういうものが現在でも残っていたりします。これが第6段階で、全国的な普及。その享受者が変わる。それから貴族の生活状態が、経済的には落ちてくるわけでありまして、そうならば当然蹴鞠の内容が変わってくる。まあ、芸能史で申しますと、社会的な研究をする。その芸能なり、なんなりを囲む社会的な研究をする。

例えば家元制なんかそうでありますし、それからその芸能が他の芸能とどういう関係を持つか。例えば蹴鞠ですと能であるとか、それから連歌であるとか、あるいは舞楽であるとか、ああいうものと文化的にはつながりがある。そういったものはやはり、社会的な研究、その文化の周辺領域との関わり、あるいは、その文化を構成する社会的な要素の研究、というのが一つであります。

だけれどもそれはゲームをオブラートに包んでしまって、中身はあまりぱっと分けない研究であります。

ところがもう一つの方は、芸能の研究というのがありまして、これは、ぱっと中身を分けまして、蹴鞠なら蹴鞠が12世紀の蹴鞠と15世紀の蹴鞠とは、どう違うのか、これは大変難しくございますけれども、特に楽譜が残っているわけでもなし、あるいは造形美術のように、今、造

形されたものが残っているわけでもなし、どう違うのかと大変難しい。難しいけれども、絵であるとか、あるいはその伝授書であるとか、そういうものを通して知るよりいたし方ありませんので、そういうことをやるしかない。

しかしスポーツ史にとって、やはり芸態の変化というのは、大変大事でありまして、スポーツの将来を考えるとというときに、どうふうにかこのスポーツは変わっていくのであろう。あるいは変わって行くべきであらう、あるいは、どう変えたらよりみんなに受け入れられるようになるのであろうと、というようなことを考えると、やはりそういう芸態の変化に関わる研究というのは、絶対に必要なわけです。時間軸に沿って、どう芸態が変わっていくのであろう、社会変化に対して、その芸はどう変わるか。まあ、能なんかは典型的で、舞台がそれこそ、どの程度受けるかということ、メルクマールにして、一所懸命世阿弥は、芸をやっていた。

ところが、今は見る人に合わせるのではなくて、やっている役者に見る人が合わせるような見方を強いられているわけでありまして、これは、随分違ってきてしまった話でありますけれども、でも、スポーツに関しても、やはりそうでありまして、そういう芸態の変化というものが当然あるのだ。

で、第6段階ぐらいになりますと、やはり変わってくる。これは様式の変化ということになりまして、天皇が出て、上皇が出て。あるいは将軍が出て、群臣が集まって上手い具合に注目をそこに集めてプレーをする。晴れの鞠会というのが、第5段階までの蹴鞠のメインイベントでありました。

ところが、第6段階から、下はどうもそういう晴れのイベントというのは無いことはないのだけれども、大変形式化してまいりまして、あまり上手でなくなる。むしろ、もっとそれ以外のところで例えば、扇くじという形式で、みんな好きな連中が、サロンのように集まって、蹴鞠をやろうよということになる。

じゃあ誰がどのポジションに立つか。大体、晴れの鞠会となると身分とか腕前とか、あるい

は家柄、家元であるかどうかということで、立つポジションが決まってくる。ところが扇くじというのは、そういうのは全部なしにする。その当時のお茶の寄合いと同じですね。

みんな一人、一人扇子を持ってくる。そしてその扇子を当番に預ける。そうすると当番が勝手に誰の扇子か分からないけど、順番にごちゃごちゃに集めて、ポジションに置いていく。そこで、はい置きましたからどうぞと言うと、自分の扇の所へその人が行って、そのポジションになる、というような趣向の大変お茶会的な感じの会が始まるというようなものもありますし、それから蹴鞠のコートの上に垣根が建っている。これは貴族の屋敷の庭が狭くなってきたのが原因なのかなと思うのですが、これは分かりません。私の推論になります。

とにかく垣根がこう建ちまして、割合周りが狭くなる。周りが狭くなると動きも激しいプレーというか、遠くまで鞠を追いかけて行って、なんかするというプレーが減ってくる。で、どうするか、そうすると自分の体に鞠を懸ける、懸けて蹴鞠をやる。というようなプレーが多くなる。言ってもいれば体を使ってボールを操作して最後に足下に降りてくればポンと上げる。そういうプレーが多くなって、遠くの鞠を追いかけていく、スライディングして上げて、それでまた元に戻してというようなことが少なくなる。当然そうですね、コートが狭くなる。野球で言いますと外野のフェンスがうーんと前にきちゃったような感じになりますので、そうやってしまいますけども。

まあ、そんな変化がこの辺で起こってまいります。そこで、曲足というのは、ボールを扱うアクロバティックなキックのことを申しますけども、いろんなバラエティな曲足、今までの曲足と違ったジャンルのものが出てきます。これが第6段階であります。

じゃ第7段階というのは、江戸時代になりまして、この江戸時代というのは、やはり通史的に見ますと、どうも日本では徳川幕府の権力というのは大変強力であるという感じがいたします。簡単に言いますと、ああいう中央権力が強

いから家元の権利が守られている。言ってみれば、著作権法であるとか何かレコード盤の権利であるとか、そういうものが無政府状態だったら守られない。自分の作ったものは、誰か勝手に使われても文句は言えない。文句を言っても全然効果が無い。だけど、そういった法律ができ、それをきちっと執行してくれる政府権力ができれば、守られるわけです。

それと同じことで江戸時代というのは、飛鳥井家が主体であります。飛鳥井・難波という公家の鞠の家元の権限が大変強く保護されていまして、どちらかと言うと身分の低い人達。これは結構、江戸時代の初期ぐらいまではやっていた。大目に見られていたのですが、身分の低い人どうして、庶民に教えてそれで弟子をとってということをやっても良かったのです。

ところが江戸時代になりますと、どうもそれが駄目になりまして、飛鳥井家をないがしろにして、人前でアクロバティックな曲足をやると罪になる。分をわきまえない、とんでもない奴だということで島流しになったという例がございまして、それがこの年表では17世紀の第6項目目になりまして、外郎(ういろう)右近という人がそういうアクロバティックなキックを人前で、大名の前でやって大変人気を博した。それはけしからんといって、大島に流されるという話がございますけれども、これは飛鳥井家からの訴えでそうなったということになりまして、どうも、大変窮屈になってくる。

簡単に申しますと、庶民の能力、スポーツの自由な発展が権力によって阻まれるという。そういう事実がこの辺になると出てくるようになります。どうも幕藩体制とか家元制というのはこの辺にくると、蹴鞠の発展にはプレーキだなあという感じがいたしまして、日本でボールゲームがどうも、前近代のボールゲームが近代に適應しなかったのは、どうもその辺にあるのかなという気がいたしますけども。

これも全く、仮説も仮説。思いつきにすぎません。ただ、そういう分をわきまえないことは駄目ですが、分に甘んじて飛鳥井家に弟子入りをするとか、あまり人目に目立つような曲足を

蹴らなければ、結構蹴鞠というのは、江戸時代も盛んでありまして、18世紀の第4項目目から見ていただきますと、信州、これはたまたまそういう記録が残っているからでございますが、他の地方でも当然あるかも知れませんが、信州の上田地方では、百姓といいまして、上層のお百姓さんたち、名主とか、村役人クラスの人達、そういう人達の間では大変蹴鞠とか、それとセットとしてお茶とか、俳句とかが盛んで、そういうものを教えに来る先生がいる。国を廻ってね、そういうところに少し滞在して教えて、また次の所へ行く。芭蕉みたいな人を結構、彷彿とさせるような人がいたり、あるいはそこに腰を落ちつけて、それっきりそこに永住してしまった人もいますけども、そういった記録が出て参ります。

それから、江戸、あるいは大阪でも、かなり有力な商人が飛鳥井家、難波家の、弟子になって、ちょうど取り継ぎ師匠と申しまして、家元と弟子との間に立つ。そういう取り継の師匠になりましてネットワークを維持していくというような、ことがございます。

で、そういう人達は、将軍家の江戸城の中で代替わりごとに、蹴鞠をやってみせる。なぜやってみせるのか、代替わりごとに将軍は飛鳥井家とか、難波家に、お前のところの蹴鞠の指導権、免許権というのは、私が保証するよという、お墨付きを常に渡すわけでありまして。そのたびに家元の本家が、弟子を連れて出て行って、一同で蹴鞠をやってみせる。そういうことをやったわけです。そういうときに、そういう有力な町民やお百姓が出て行っている。ただそのときに、町民とか百姓身分では将軍様の前に出るのはちょっとまずいから、侍身分として、烏帽子は侍烏帽子をかぶれということでやったのです。これが、第7段階。それで免許をするというのは、権力ですから、免許、お墨付きについては、それをするというのは、盆、暮れあるいは免許状を渡すときに見返りのお礼がくる。そのお礼は当然天皇のところにも少し行くわけですし、まあ、そんな構造になっている。

これが、明治維新まで続くわけでございます

が、最後の段階は20世紀以降の第8段階で、大日本蹴鞠会、今は、蹴鞠保存会になっていきますけども、これが明治天皇というのは、大変国粹的なところがある方で、伝統文化を大事にする。蹴鞠を保存するために、お前やれということで、飛鳥井家が、また蹴鞠保存会を組織してやるわけですが、途中からいろんな華族が、飛鳥井家は今や、全く蹴鞠とは関係なくなっちゃいましたが、これは20世紀になってからのお話でございます。

但し、伝統文化としては、ご存じの通り一部の武道とか、相撲とか、それから茶道、華道、それから歌舞伎、能、浄瑠璃、そういったものに比べれば蹴鞠というのは、まあ滅びたに等しいのです。現代文化としては生きていない。現代社会に生きていないと言いますか、適応していません。やはり伝統的な文化というのは、近代になったときにそれなりの努力をみんなしている。

これは、みなさん体育史で、教わったと思いますけれども、必ず柔道でも、剣道でも、近代社会に適応する努力をしている。

ところが、蹴鞠はそれをした気配が無い。そこが違うのです。これはお茶でも華道でも、あるいは礼法でも、学校という社会に入り込むということで、命を延ばしている。あるいは、今ではより盛んになってきている。

例えば、水術というのは、前近代で見ても下の下でありました。けどもむしろ明治以降学校の隅田川で教室を開いたりして、学校の中に入っていったりしたことで、大変盛んになった。

そういった近代に対して適応する意欲というのか、能力というのが、そういうものが現在残っている伝統文化と蹴鞠では違う。それはなぜかということは私には分からない。だけど、形態から見ればそうなります。これがやはり日本の文化史の中では非常に、一般論として日本文化や日本史の中では非常に重大な問題であろうというふうに思っているわけでありまして。

で、時間があと20分ぐらいになってしまいましたので、4の方に進みたいと思いますが、私が前に第2のところ、洗練されている、大変

凝っているようなことを申しましたけれども、これは『内外三時抄』という本を読んだときに、そこに南庭と書いてあるのです。まず「懸の木」というのが読んでいただいてお分かりだと思っておりますが、「懸の木」というのは、蹴鞠のコートの四隅にこう、コートの中の中央部に正方形の四隅に、正式には桜と柳と楓と松。四季を表す。春夏秋冬を象徴する木なのですが、それは、方向を東と南と西と北。それを表している。

そういう自然を愛するとか、あるいはそう陰陽道といいますか、植栽習慣で、植えるという面もありますけれども、もう一つはやはり、先ほども申しました、ウオターハザードなどと同じでありまして、やはりそういう木に、この鞠を掛けて、我々は学生時代は大変のんびりとしたパチンコでありましたけれども、あの釘を伝わって、玉が落ちてくるように、懸の木の枝を伝わって鞠が落ちてくる。

というようにいろいろな、枝振りを作るように剪定をする、こんなことが『内外三時抄』には、書いてある。

それは上手い人がやる。まあ、言ってみれば家元がそういうことを一所懸命勉強して、面白くなるように枝振りを作らなくてはいけないよと、こういうことであります。

しかも、鞠をやる人によって、もちろん下手な人にはやさしくしなければいけないし、上手い人がいるのだったら難しくしなければいけない。それからいろんな難しいことや、やさしい木を植えておいて、上手い人は難しい木に蹴るポジションを取らなくてはならない。下手な人はやさしいところに入る。そういったようなことをするのだということを書いてあります。これはすごく凝っているなというふうに思ったわけでございます。要するにゴルフのコースを作る。あるいはパチンコの釘師みたいなものがあります。これは大変なスポーツであると思えます。これを鞠の道を作るという表現をしています。

それからもう一つ、大変合理的であるということ、8人で鞠を蹴上げる。それで、たくさん蹴った方がよろしい。落とさない、バレーボー

ルのサークルパスみたいなもので、地面に落としてはいけない。あるいは足だけである。ヘディングもいけない。いうのでやるわけでありませうけれども、8人でやりますから、やはりみんなボールに触りたい。だけど一人一番上手い人がずっと続けてやる方が、これは一番長く続くわけでありませう。

しかし、一人で玉を独り占めにしたのでは、周りの人は8人でやる意味がないわけで嫌われてしまう。そうかと言って、1球ずつ、回していくのでは落ちつかない。自分の腕も発揮できない。どうするか、一段三足でやる。一人が続けて打つのは3つがよろしい。これを一段三足という表現を使う。

人から貰うのが1つ、パスを貰ってレシーブですよね。レシーブが一足。これは向こうから来るのを自分の鞠にするから、軽く蹴る。それで鞠を我々の言葉で言うと、ボールの動きを殺しておいて、蹴りやすくしておいて、今度は自分で思い切って蹴る。これが2つ目。それでうんと高く自分の腕が分るように蹴る。

で、3つ目は、今度は人に渡すパスを蹴る。パスを蹴るのは、やはり人が捕りやすいように、適当な高さでふんわりいい回転を掛けてやる。それが3つ目です。

要するにレシーブとサッカーで言うとドリブルということになりますけれども、自分で思いきり蹴るのです。最後にパスでするわけで合計三つ。一人で三つ持つのが一番よろしい、これがオーソドックスなやり方。

難しい局面の所に行っちゃって木にぶつかったりなんかして上手くいかなくて、自分のところへ戻ってきてしまった。しょうがないから四つ五つ蹴ってもいいよ。だけど、そういう事が無い限りは三つ目で相手に渡すのが本当である。これは大変合理的な言い方でありまして、これを一段三足というふうに言います。

それで2千球続けたなんて話がございまして、ここから全部2千球続けたというのは、その鞠が良かったんだって鞠に位を与えたという話なんて残っておりますけれども、こういう事を見た時に大変合理的である。

それともう一つその一段三足の時には必ず声を掛ける。自分が蹴る時には必ず声を掛ける。これは我々野球でみんなの上にフライが上がった時には、捕る人は一所懸命に捕る。そんなものは観衆がうるさくて、声じゃ駄目だからとみんな上を見ている、自分の動作が見えるようにおおげさな動作をして自分がボールを捕るという意志表示なんです。バレーボールでも後ろの人に、後ろの人は見えませんからやっぱり声を掛けなければいけない。

そういった声をやっぱり蹴鞠でも必ず掛ける。ボールを貰う時は「オウ」と声を掛ける。自分で次に蹴る時は「アリ」という声を掛ける。それで人に渡すぞという時は「ヤ」という声を掛けて蹴る。そうすると次の人が、ああ、貰わなきゃいけないなというので、自分の方に来たのを知るわけでありまして、ちゃんと1段三足で自分のやるプレーを予告するその声を三通りに分けて掛ける。これも大変合理的なプレーの組み立てであります。そんな事で面白さを作り出すというのも面白さの創出という点とか、或は合理性とかいう点で、大変よくできたスポーツだなあというふうに思ったわけであります。

それで最後にもう一つこの『内外三時抄』という本は、ここに13世紀のところを見て頂きたいんですが、13世紀の下から2行目の流派の鞠書の出現、一卷書、難波家、1248年、『内外三時抄』の飛鳥井家1291年。

これでありまして13世紀の末に出来ています。これを書いた人は飛鳥井雅有。丁度蹴鞠が盛んになってきた頃で、貴族の社会では蹴鞠の家だというのは3つありまして、それがやっぱり家元争いしてました。それはやっぱり公家の社会は長生きした方が有利でありまして、長生きしていれば、どんどん位が上がっていくし、自分の家の決められた限度の位までは上がることができる。早死にすると駄目なんです。でその息子も大変不利になるのです。そういうことで長生きした方が得なんです。もちろんある程度能力がなければなんですけど。

ところが飛鳥井家というのがどうも13世紀は健康に恵まれてませんで、当主割合早死にを

しまして、その雅有の時代に雅有一人になっちゃったのです。自分の息子が丁度20歳ぐらいになってこれから鞠会で活躍しようという時に死んじゃった。仕方がないから甥を養子にもらったんですけども10歳ぐらいでまだ駄目なんですわね。

それでこの雅有も1291年には、50歳。もう50歳ぐらいになりますと腰も悪いし、この人は江戸と鎌倉と京都の間を何回も往復しているものですから馬から落っこちた事があるらしいんで、腰を痛めてしまい、なかなかプレーヤーとして優秀なんですけども、その当時最も格の高いプレーヤーで家元でもあったんですが、どうもやっぱり自分の技術を息子に直接、10歳より前ですから教えるのが出来ない。そこで仕方がないから『内外三時抄』でこまごまと練習要領を書き残して、その10年後に死ぬんですけども、一本書き残してというのがその『内外三時抄』です。こういう種類の本というのは蹴鞠の世界では、他にはちょっと今までまだ見たことが無い。こんなに細かいのは。やっぱりそういう事情から大変珍しい出来方です。しかもこの本は他の家に見せたら、これは企業秘密ですから具合が悪いんで、息子以外長男以外は絶対見せちゃいけない。いわば門外不出の本です。その本を持っていることが飛鳥井家の嫡流の印、本家の印なんです。

ですから、その本はおそらくそこから後200年ぐらいは、飛鳥井家の外に出てないはずですよ。ですから飛鳥井家の当主は弟子に教える時にその本の中から教える部分を切り取ってきてと言うか、そこを抜き書きにして弟子に渡す。言ってみれば技術を切り売りしているわけです、そういう非常に有名な本が『晩学抄』という、15世紀の末ぐらいに書かれている。大変あの『内外三時抄』の練習編が知られるまでは最も蹴鞠の技術の事がよく解ると言われていた本で、『晩学抄』という本があります。

この雅有が書いたのが13世紀の末ですから、200年ぐらい他の家には伝わっていない。それでこの『晩学抄』を書いた人がこの飛鳥井雅有の何代か後の人で正康という人なんですけど

も、この人が自分の甥と相続争いをした時に、自分は自分の兄の当主から『内外三時抄』を貰っている。だから自分が当主である。甥は自分の兄の息子で長男は長男だから、まあ、筋から行くとそうなんだけど自分がこれを持っている間は、自分が本家であるということを堂々と主張していますね。

それでその正康が雅有の『内外三時抄』の1番いい練習篇の部分を抜粋して、この『晩学抄』という本を自分の弟子に渡した。その頃が、飛鳥井家は生活が苦しい時代ですから、かなり企業秘密を弟子に渡しているわけです。売ったんですけど、もちろん現物は持っている。ですが、『晩学抄』と『内外三時抄』を比べてみると、『内外三時抄』の技術編の最も技術の高い部分だけを抜粋して『晩学抄』となっている。

要するに1番最高の部分を教える。1番遅く教える部分だというので間もなく書物に名前を付ける。朝昼晩の晩ですね。三時抄というのは朝昼晩という意味で、初・中・高というのですね、3段階で1番易しい。まん中。1番難しいの、そういう三時があるんです。

その中の晩の部分をつなめて、抜書きして教えるのが『晩学抄』というようにぐらに難しい、大変詳しい本である。

そこで、これだけ練習の方法を書いた。こういう順番でやれというものですが、1番初めに何を。「柱に沿う」というのは、自分の蹴鞠の基本姿勢作る時に柱があったらまっすぐ立って、ボールが上から来るから、こうやってたんでは足にうまく掛からないから、こういう格好でこうなってしまうので、ボールをまっすぐ落として足の所にもってきてポンと上げるとスッと上がる。ということで、まっすぐな姿勢を作るといのが大変大事になる。それを作るにはどうするのか、柱に沿って立つ練習をします。そうすればまっすぐの姿勢が出来てくる。これが柱に沿う練習です。

その次には、その姿勢で一所懸命鞠を蹴る動作、足を動かしてやるんです。これが空鞠。その次に何があるか。ボールを糸に結び付けて天井から吊して、これを足で1, 2, 3で右足で蹴

るんですけども、右左右で蹴る。右左右で蹴る。これを3拍子で蹴るんです。右左右、右左右これを鞠を釣って地面すれすれぐらいの高さで右足で蹴る練習。フットワークをやって右足を蹴る練習をする。蹴鞠保存会の人に聞きますと保存会でも昔はやっていて、釣り鞠3年と言われたと。3年間絶対やれと言われたそうです。それじゃばかばかしくて大抵辞めちゃうと思うのですが、これが釣り鞠です。

その次にどうするか。こういう角へ来まして、そうするとボールが逃げませんから鞠を壁に蹴かけると、ポーンと当たって自分の所に返ってくる。これを下まで落としてポーンとまた蹴る。これを何回も何回も繰り返すんです。これが千回ぐらいできるようなったら、次に進んでもよろしいというようなことが書いてありましてかなり厳しい。これを隅の小鞠というふうに書いてある。

その次に打ち鞠。そういう壁の所ではなくて、何もない部屋の中で天井に当ててこう帰ってくるのを、これを打ち鞠と言う。

まっすぐ上から来るのを蹴るといのは、これは出来ません。その次には木を越すというので、外へ出て懸の木の所で、木ごしにこう鞠を中へ蹴っていく練習。

こういうのは基本練習の一つです。それから桶鞠というのは、一段三足の真ん中の足ですね。自分で殺した鞠を2足目に思い切ってポーンと高く上げる。これで自分の腕が分かるという。

その2番目の男足（おあし）と言いまして、女性には悪いのですが、こういう高々と蹴るのを男足と言いまして、つなぎの足を蹴るのは女足（めあし）と言うんです。それは鎌倉時代の話ですから、その男足を受けるために、男足の高さは大体4メートル50、1丈5尺と言っているんですが、4.5メートル、この4.5メートルのところに水桶をこう逆さまにして吊しまして、だから梁かなんかから吊しまして、その下の桶はもちろん水は空です。そのころの桶というのは檜を剥いで、薄く剥いで輪っかにして底を付けた割合やわな物です。それをこう逆さにする。その下に同じ円を書きまして、自分はそこに

立って鞠を手で落としてこれを蹴ってここに入れる。入れれば落ちてくる。これを一所懸命練習をする。要するに4メートル50のそこへきちっとコントロールできる練習一所懸命やる。初め1球ずつやって、それは何球きちっとできるようになったら、次に何回も続けて、ボレーキックをやってもよろしいというようなことを言っている。

それで雅有は「自分はこれを、1日100球100日続けたんだ」というようなことを書いている。これが桶鞠。

それから蹴鞠のコートには近所に屋根がありますから、屋根の上に鞠が乗った時に、これを落ちてくる鞠をキャッチして蹴る練習をする。これを軒返りというふうに言うんですね。

鞠長（まりたけ）の数鞠というのは、さっきの桶鞠の桶をはずしたやつで、何回も何回も4メートル50の高さに続けて蹴る。何百と続けて蹴ってよろしい。

最後に碁盤の鞠と言う、これは蹴鞠の家の専門家というのは大変辛い立場にあったようで、天皇とか上皇が気が向いたら、その家元が来た時碁盤の上で蹴鞠を蹴ってやるわけです。要するに同じところに上げないと碁盤から本人が落ちこちてしまいますから、それをやらせることがあったので、そういうことがあるからちゃんと碁盤の上の鞠を練習しておくと子供に言い残したんですね、碁盤に乗かって、鞠を蹴る練習をする。その時はどうするか碁盤の1番前に立つわけですね、前に立って蹴っていれば大丈夫。後ろに立っていると上手いかないんだというようなこと書いてあります。

そんなようなことで、大変練習の仕方を、しかも繰り返し繰り返し練習する。反復練習するんです。まあ日本人は稽古好きだ、練習好きだと言います。これはどうも平安の昔から、鎌倉の昔からそうでありまして、その最後に「足魂（あしたましい）生まれけり」というのがございまして、これはまあそういうような練習して、懸の木に枝にポーと強く当たった鞠が強く跳ね返って、どこかへ行ってしまふ。それを追っかけてパッと蹴る。これを「突き延び」と言っ

て大変難しい。これは敏捷性を要する。ただそれをやる時に当たった鞠を見て「あーあっち行った」じゃ遅いんだ。予めあっち行くことを予測して、枝振りを見たら予測できるんだから、それを予測しておいて、鞠を蹴って枝に当たった音でどっち行くか判断して、わき目もふらずに行くんだ、それで最後スライディングして上げる。そういう勘ができるのは、われわれから言うところの勘なんですけども、野球の業界用語では勘と言いますが。そういう勘ができるのは、やっぱり何回も反復練習しなきゃだめである。そういう状態になったら足が、あるいは心に従わずに鞠の音によって自然に足が動くようになる。

そこまで練習しないと駄目なんです、大変、心と体を分けた二元論で、ヨーロッパも近代のスポーツの中であった話なんですけど、日本では割合そういう書き方は珍しいんですけども、そういうふうを書いてありまして、そうなった状態は「足魂出できて」と書いてあるんですね。足に心が出来るのだと。そうしたらそこまでいったら鞠が蹴れる。

でも、こういうのを読んでいますと我々のこの時代も、そう進歩していないのかなという感じがしたわけでありまして。

ただ、そういった貴族というのはやはり見栄っぱりでありまして、そういった努力があまり人に知られるということはおもしろくない。やっぱり生まれつきの才能があるのだというふうに見られたい。そこで「上手は淀川の水のごときなり」など、上はのどかで下速くなり。

要するに表面は非常にのんびりして見せて、だけど本当のところ底はものすごく速い。淀川の水とは、そういうものらしくて、底は非常に速い。それと同じように蹴鞠の上手な人は、上半身は非常にたおやかに外目にゆったりと見せる。だけど足は、油断無く動かして、パッと動けるようにしてある。これが上手の心得であるというふうに書いてある。このへんはいわば日本のスポーツの美学にあるのでございまして、イチロー君はどうもその系統を引いているようであります。

最後に、私は今、江戸時代の鞠のことを調べ

ているものですから、こういうふうに江戸時代の事項を沢山書いて参りました。江戸時代は先ほど申しましたように農民とか町人。もちろん旦那衆ですけれども、蹴鞠をやるようになっていった。その時に蹴鞠の師匠が彼らに教えていること、鞠の十徳ということを教える。

鞠はやると、10 いいことがある。なんだと言いますと、まず神徳がある。神のご加護が得られる。これは昔、科学以前の時代ですから、まず第一。

第二番目、足効く、それから目が速くなる。動体視力ということですかね。それから姿良くなる。姿勢或は動作が良くなる。第五番目は無病になる。第六番目は愛敬、要するに人から感じとして好かれる感じ。動作や何か人好きのするような感じになる。それから上下に受く。要するに付き合いがよくなる。昔は身分社会ですからどうしても上下ということ。蹴鞠をやっているとやっぱり上の人とか、下の人とかとちゃんとつき合えるような、理解されるようになる。

それから8番目。1人慰む。蹴鞠はさっき申しましたように8人でやるんですけど、1人で練習してたってさっきのようにいろんな練習法があって、1人でも楽しめるよと。

それから第9番目は1芸多聞。要するに蹴鞠を覚えたということは、やっぱり世の中から評価される芸能が1つ身に付いたことだということ、「あ、あいつは蹴鞠ができるんだ」ということで世の中から見直されるというんですか、というようなことであります。

今もそういうような芸を持てば「この人は絵が上手なんだ」とかというようなと同じような「いやあの人は結構能は素人だけど能が上手くできるんだよ」とかそういうようなもの。

最後に成仏ということで蹴鞠をやっていると極楽に行ける、これは神様で始まって仏に終わる。今でも我々そうですけれども生まれた時にはお宮参りして、死んだときはお坊さんが来るのと割合似ておりますけれども。これはそういった意味ですから、これはそれぞれ故実あるんですね。鎌倉時代、平安時代以来いろいろ蹴

鞠の話が残っている故実ありますが、これを引き出しますとまた大変長くなりますのでこのぐらいに致しておきます。

こんなようなことで江戸時代の人、大変我々と同じように蹴鞠の効能と言うんですか、生活上の効能ということその売り込み文句にするわけです。そういうスポーツのあり方というのは江戸時代は蹴鞠というのが、道楽息子のやることであまり喜ばれてない。ここの年表の18世紀の1番最後に書いてありますように、あまり結構なこととは思われてないんですが、道楽息子が遊びを覚える前、ばくちや女遊びを覚える前にやることだと思われていたわけでありすけれども。やはりこういった行動というのは大変現在のスポーツになぞらえて見ますと、似た状態である。やはりそういった状態、状況というのは調べてみる価値があるかなというふうに思っています。

これはちなみに申しますとこの18世紀の下から何行目かにあります、紀井長左右衛門という大阪の取り継ぎ役がおりますが、これは大阪の大商人らしい薬屋なんからしいんですけども、この人が写した本、この人のオリジナルではないけど、この人が写した本で蹴鞠の『俗学抄』という写本の本の中にこれが入っていました。以上であります。どうも時間を超過致しまして。
(拍手)

司会：

大変造詣の深い所をお話頂いたわけでございます。日本人がかつて、これほどスポーツの技術を発達させて楽しんでいたというところが少しわかってもらえたんじゃないかというふうに思うわけです。それほどスポーツを楽しむという面があったのにも関わらず、日本の近代史は先ほど最初に渡辺先生が言われたように、軍国主義の歴史で、こういう遊びという面にやはりあまり目を向けないで来てしまったというところがあると思うんです。

改めてこういう歴史を我々は学ぶことによってこれからの日本の文化というものをもっと豊かなものにしていくということが求められているんじゃないかと思えます。

ここには社会体育専攻の人達がいると思います。これはやっぱり昔の社会体育として考えることができると思います、こんなに社会体育のある面では発展した面があったのだというようなこともわかるでしょうし、あるいは、そのトレーニングの方法に関しても、よく観察しそのプリンシプルをつかまえ、これをその自分の子孫に伝えようとしてたというところで、そのプリンシプルについては生理学的なものもあると思いますし、心理学的なものもあると思います。そういうことでここにご出席の皆さんそれぞれ関係のある問題があると思います。そこであまり長くは質問時間取れませんが、少し時間頂いて皆さんから質問をして頂きたい思います。

大学院成宮：

大学院の成宮ですけれども。

先生のお話の中で、地方への広がり、それが先生が指摘された独自の変革期以降は貴族が武家のところに出て行って、こう教えるような形がみられたのですが、それ以前の時代では、琴平の例を挙げられたのですが、その他に地方でやられていたような例があったかどうか、それでもそれがなければもう貴族の独占のようなものではなかったかどうか、その点を教えていただきたいのですけど。

渡辺先生：

あのう可能性としては無いことはなかったと思いますが、歴史、特に我々がやっているような歴史というのは史料に頼って、それは文書史料が大変多いので、その文書史料で見ると限りで、なかなかそういう地方に、例えば13世紀とか12世紀段階で蹴鞠をやった人がいたというのは、私は見たことがない。

ただ鎌倉は別です。鎌倉は頼朝以来わりあい頼朝は京都出身ですから、蹴鞠に魅力を持っていて鎌倉では、蹴鞠が大変盛んで、難波家とか、飛鳥井家とかいう家元は、むしろ鎌倉へ行って、公家文化を和歌とか蹴鞠とかを教えていた貴族ですね。

御子左家（みこひだり）というのは京都で、蹴鞠の世界では割合大きな顔をしている。鎌倉時代はね。そういうことで鎌倉と京都は史料が

残っているんですけど、どうもそれ以外のところはわかりませんけども、ああいう人達ですから鎌倉と京都往復する間には、何かやっているかも知れませんですね。ただ記録が無い。

司会者：

他の人いかがでしょうか。

松井（信）先生：

どうも有難うございました。あの鞠を蹴るのが上手くなるために、別の筋力トレーニングだとか持久力を高めるとか、そういうようなことをやったというようなことはいかがでしょうか。

渡辺先生：

筋力のトレーニングというのは、あまりないと思いますけれど。足踏みというのを盛んにします。フットワークですけども、それはそれこそ鞠なしで足で一所懸命足をこう動かす練習する。

それは足の練習でもあるし、もう1つは姿勢を崩さずに足を動かせるようにするということで、そういうことはやっているようですが、それ以外のことはあまり見てないと言いますか、少なくとも『内外三時抄』にはありません。

司会者：

はい、どうぞ、

山本（高）先生：

1つの行動、1つはこういういわゆるコントロールだとか、そういうものは神経系の能力で、わりと子供の頃にですね発達するとよく言われていますけれども。

そういうことがそういう貴族のところですね子供に何か訓練させたとかということと、それからもう1つは、そういう蹴鞠が明治の時に他の例えば柔道とかですね、そういうもの比べて何か適応できなかつた。

あそこでどういう形をとれば、適応できたんだろうかという、そういう先生のお考え、何かありましたらお聞かせ願いたい。

渡辺先生：

1つ目はいくつか例がありまして、要するに10歳前後ぐらいから、例えばこの飛鳥井雅有という人は7つから始めたということが書いてあ

りますし、それからちょっと後に難波家の当主が難波宗清という者がいますけども、それもやっぱりいくつから始めたらいいか、それはいろいろだけど、とにかくそのときから始めたということになります。

それからもう1人飛鳥井雅有のおじいさんの雅経という者、これは飛鳥井家の1番初めの開祖で、後鳥羽上皇のお気に入り、そのために大変蹴鞠のステータスが高くなったという。上手かったそうです。

その人が自分のお爺さんに、難波頼輔という者ですが、お爺さん——お父さんはどうも失脚してしまいましたので、お爺さんに育てられたのですが——お爺さんが雅有は公家に修行のために一所懸命学問の勉強を始めまして、学問の修行して、ところがある時、たまたま蹴鞠をやっているところを、そのお爺さんが見た。「これはものだ！」それで「おまえ今までは勉強させてたけど、もったいないからおまえこれから蹴鞠やれ」と、一所懸命やらせたという話を書いてありまして、それはお爺さんとは幾つの時かわからない。ただお爺さんとこの雅有の接点は16年しかない。16歳の時にはお爺さんは死んでます。それで学問をして、それから蹴鞠りをするようになってから、おまえって言われるのは、10歳前後だと思うのですけれども。ですから、やっぱりそのぐらいから始めてるのではないでしょう、少なくともやっぱり7つとか、10歳とかそれぐらいだと思います。家元師範系の人達はそのぐらいの修行はしてたと思います。ここに千日鞠というのを書いてありますが、これもそういう例の1つで、上手くなるのにはどうしたらいいのか、ある名人は「私は子どもの頃から、自分の親に、賀茂の成助の息子ですが眠いのむりやりにたたき起こされて、朝から鞠をやらされる。そのうちに面白くなってきて、自分から進んでやるようになってきた」というので、やっぱり子供の頃からやっておかなくてはいけない。それが千日続けたらいい、というようなことです。

そうすると弟子の成通というのは、じゃあというので2千日間続けたという伝説があります

けど、これは伝説であります。

司会者：

はい、どうぞ

大学院何：

中国の留学生の何と申します。中国の蹴鞠についての史料は、読んだことがありますけども、今日の先生の話はスポーツとしての蹴鞠だと思うのですが、中国の史料によれば中国では当時、軍隊のトレーニングというのでいろいろあるのですけども、日本ではトレーニングの分野で実際にスポーツではなくて、軍隊のトレーニングについてのものはあるのでしょうか。

渡辺先生：

中国ではやっぱりその軍隊のトレーニングであるということ書いてあるわけですね。その中国の蹴鞠というのは、いくつか僕はあったんじゃないかと思うんですが、どちらかというフットボール式の蹴鞠があったんじゃないか。サッカー式の要するにチームでボールを奪い合うという形式のものが、あったんじゃないか。

と言いますのは唐の時代になって、馬に乗ってこの鞠を打つポロですね、打球が流行った。その為に、それが非常に軍隊の訓練として、それは馬に乗って集団でやるわけですから、いいわけです。そのために蹴鞠が衰えてきた。だから、やはり、ボールを争奪するような形式のものであったのではないかなと思います。

で、中国のはそれで、日本のはそういう軍事的なトレーニングにもいいのだと一所懸命言うのですけども、実際には集団的にボールを奪い合うというような競技ではないから、そういうことに役に立ったかどうかは、分かりません。でも、中国がそうだったから、日本もそうだよということは蹴鞠の本に書いてあります。

それから、さっきも（山本）先生にお答えするのを、忘れまして申し訳有りませんが、明治になってからの話ですが、実際には私は一つの事実を明治になってから、飛鳥井家の対応を見たわけではないので、分かりませんけども。一つはやはり飛鳥井家は、別に蹴鞠が無くてもやっていけたということが。華族になりましたから。その他やはり、生き延びなくては行けな

いというのは、その当事者にあった。まあ、剣道なんかそうです。柔道なんかは、ちょっと違います。それから、小笠原流にしも、礼法にしても、お茶、お花にしても、そういうことがあったのではないか。

そういう点では、割合に蹴鞠の家元は伯爵になってしまいましたから、鷹揚なことが多かったのかなと思いますことが一つ。

それから、やはりヨーロッパ流のスポーツには、かなわなかったのかなというのが一つにございます。

どっちかと言うて、奈良女子大の方も言っておられましたけども、やはり蹴鞠というスポーツとしては割合に、女性原理的なところがある。雅やかとか、たおやかとかいう言葉で言い表そうとしている。ところが、ヨーロッパ近代のスポーツむしろ、マンリネスを強調する。そういう所のギャップはやっぱり、あったと思います。

山本先生：

そういう話を、勝負、勝ち負けでいうあれと、それから、なんて言うか、それと別な考え、価値観ですけども、そう言うものが、もう一方の座標軸にあってもいいんじゃないかと言うようなこと考えますけどもね。

渡辺先生：

私も、そう思うんですけど、大変、蹴鞠のためにも日本のためにも残念だなと思っておりますけども。

司会者：

守能先生、如何でしょう。

守能先生：

あの私質問なんですけど、談山神社という所ご存じだと思うんですけど、私は2年前に視察で、何かJリーグであそこを見て参りまして。その時見たんですけども、談山神社、その最初にでてくる中臣鎌足のところですね、見た感じは、下手くそだなあと思いましたですね。

渡辺先生：

その通りです。

守能先生：

なんだこれはという感じで、うちのサッカー部の方がよほど上手いですね。

でも、今日の話聞いて、例えばここにある、50から数えだしてとっている。だから昔は、相当なものだったと思いますね。そのサッカーでボレーやるのと、少しなんかしてからやりますから、根本的に違うのではないかという感じがして、やはり難しいんだなあ。

ですから、サッカー部にああ言う衣装を着せて、恐らくは立ち足が、つつ立ったまま、やるのでしょね。ですから、非常に、バランスを取りにくくて、着ているのも、柔らかでないですからね。なんかそう言う感じで、こういう結果からみると、やはり、そういったところで、昔の人は要するに、訓練をしていて、そう言う形になった。あれ見させて頂いて私も、そう、10回と続かなかった。

渡辺先生：

私ね、いや、実は、練習、現在の人達の練習風景とか、実際この場で、やってるところのビデオがあるんですけども、これを写すとイメージを壊すと思って。

本当はずかしくって、そういっちゃ悪いんですけど、条件が悪くってなかなか練習が出来ないし、子供の頃からやってるわけじゃないから気の毒なのですけども、本当に、私が見ても、30続いてやっとですから。

で、蹴鞠とサッカーの違いのところは、奈良女子大の山本さんが上手く言い表してくれたのですが、蹴鞠はボールが垂直に動く、サッカーはやっぱり水平方向に動くんだらうと、その違いは大きいと。あの人は、体操ですけど、そんなこと言っておられた。なるほど上手く言うなあと思いました。先生の言われる通りです。そのまま、伝えてあげたいのですけど。あの人たちに。

司会者：

まだ、質問があろうかと思えますけども、この辺で、今日の講演会を終らせて頂きたいと存じます。どうも、先生有難うございました。

渡辺先生：

こちらこそ、大勢の方にお聞き頂きまして、有難うございました。

(拍手)